大室小学校校庭Ⅲ遺跡

墓地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

本遺跡の所在する大室地区は、本市でも屈指の歴史的遺産に恵まれた地域です。国指定史跡の３二子古墳が、本遺跡の北方に並び、これを核とした史跡公園の整備も着々と進んでいます。休日には見学者で駐車場も満杯になる程で、市内外に、本市が有数の古墳数を誇る都市であることが浸透しつつあります。

また最近では、同公園内から旧石器が出土し、市内でも最も古くから人跡を認める地の一つとして知られています。

周辺は田畑の緑に恵まれ、かつては薬用植物の栽培、そして今ではランなどのハウス栽培として全国的に知られるように、常に先進の営農活動を中心としてきた地域と言えます。

北関東自動車道の建設に伴い、地盤整備の必要性から予測される人口増に対応するため、今回の発掘調査を実施することとなりましたが、その結果縄文時代の住居址１軒と古墳時代の住居址２軒を調査することができました。一つ一つの地道な調査の積み重ねが、各時代の土地利用の状況や人口推移等の今後における最も基本的な基礎資料を与えてくれるものとなります。

このような結果を得られたのも、開発者側である前橋市の援助と、精力的に調査に従事してくださった関係諸機関や発掘作業員の皆様のおかげによるものと、心からのお礼を申し述べて序といたします。

平成11年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長　渡　辺　勝　利

例　　言

1　本報告書は、公共開発（墓地造成工事）に伴う大室小学校校庭III遺跡発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地　前橋市西大室町字上諏訪2811-1

3　調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長　渡辺勝利）の指導のもとに、開発行為者萩原弥惣治（前橋市長）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（代表取締役　須永眞弘）が実施した。

調査担当者　眞塩明男・古屋秀登（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）

新保一美（スナガ環境測設株式会社）

調　査　員　権田友寿（スナガ環境測設株式会社）

4　調査期間　平成11年1月18日～平成11年1月30日

整理期間　平成11年1月19日～平成11年3月24日

5　調査面積　A＝400㎡

6　出土遺物は前橋市教育委員会が保管する。

7　測量・調査計画…須永眞弘、調査担当…新保一美、測量・実測…権田友寿・須永薫子・内山恵美子、写真撮影…新保一美、安全管理・表土掘削…須永眞弘・都丸保男、作業事務…須永豊・柴崎信江が担当した。

8　本書は、調査団の指導のもと、スナガ環境測設株式会社が作成に当たり、原稿執筆…新保一美、編集…須永眞弘、校正…金子正人、荻野博巳、実測図作成・整理…権田友寿、遺物洗浄…須永豊・柴崎信江、注記…新保一美・柴崎信江、復元…新保一美、遺物実測…佐々木智恵子、内業事務…須永豊・柴崎信江が担当した。

9　調査に参加した方々（敬称略）

飯島いし　飯島勝亥　石川サワ子　内山恵美子　高坂なみ　高坂やすの　後藤きく江　後藤初治　斉藤まき子　関根時太　都丸藤子　長谷川美津江

凡　　例

1　遺跡の位置の基準

基準点　国土地理院の三角点および水準点　　座標系　第IX系

A・0点座標値　　X＝42460.000m　　Y-57324.000m　水準点　BM.1＝116.00m

BM.2＝115.50m

2　遺跡の位置図

国土地理院発行2万5千分の1「大胡」を加筆して使用した。

3　実測図の縮尺

遺跡平面図　S＝1：400（全体図）　　遺物実測図　S＝1：4を原則とした。

遺構実測図　S＝1：60を原則とした。これら以外の縮尺を使用したときは、その都度表示した。

4　遺構の略号は次のとおりである。

縄文時代住居址＝J　古墳時代住居址＝H　　ピット（柱穴）＝P　　土坑＝D

5　土層断面の土色は農林省農林水産技術会議事務局　監修　財団法人　日本色彩研究所　色票監修　新版標準土色帖による。

目　　次

序
例言
凡例
目次
Ⅰ　発掘調査の経緯……2
　1　発掘調査に至る経緯……2
　2　発掘調査の経過……2
Ⅱ　発掘調査の概要……3
　1　遺跡の位置と周辺の遺跡……3
　2　基本土層……4
Ⅲ　検出された遺構と遺物……5
　1　縄文時代……5
　2　古墳時代……5
　3　その他の遺構……5
Ⅳ　まとめ……6

挿図目次

第1図　遺跡の位置と周辺遺跡図……3
第2図　標準層位……4
第3図　遺構全体平面図……6
第4図　H－1号住居址平面・断面図……7
第5図　H－2号住居址平面・断面図……8
第6図　H－2号住居址カマド平面・断面図
　　J－1号住居址平面・断面図……9
第7図　出土遺物実測図……10

写真図版目次

図版1　遺構写真……11
図版2　出土遺物写真……12

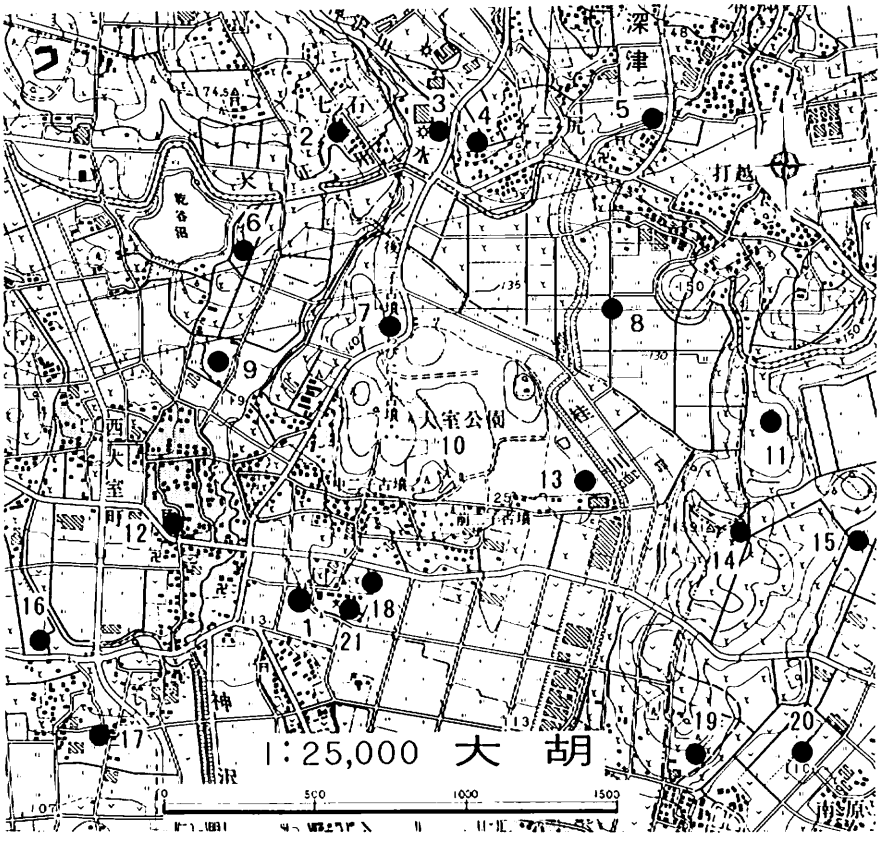
Ⅰ　発掘調査の経緯

1　発掘調査に至る経緯

平成10年11月25日、前橋市財政部より西大室町2811－1地内における開発行為に先立つ埋蔵文化財確認調査の依頼が、前橋市教育委員会文化財保護課に提出された。市教育委員会はこれを受け、当該地の試掘調査を実施したところ、南北試掘坑の北側道路部分よりと申請地内中程の緩傾斜終縁部で住居址と思われる遺構を2ヶ所検出した。この結果、開発に当たっては、事前に発掘調査が必要となる旨説明した。これを受け、開発に先立つ記録保存の措置を講ずることとなり、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が調査を実施することとなり、同調査団とスナガ環境測設株式会社の間で委託契約が締結され、現地での発掘調査を開始した。

2　発掘調査の経過

平成11年1月19日に資材・事務所用プレハブを搬入し、隣接する小学校の児童の安全を確保するため、充分な対策を講じた後、直ちに表土掘削を開始した。順調な作業工程のもとに、同1月30日には完掘上空撮影を実施し、調査を完了することができた。



1　大室小学校校庭Ⅲ遺跡
2　七ツ石遺跡（巨石信仰）
3　三ヶ尻西遺跡
（７世紀製鉄址・住居址）
4　西原遺跡（弥生時代）
5　西迎遺跡（弥生時代）
6　北山遺跡（古墳時代）
7　上縄引遺跡（方形周溝墓址）
8　五反田遺跡（弥生時代）
9　大室元城址（中世）
10　内堀遺跡群＝大室公園内
（旧石器・古墳時代）
11　赤堀茶臼山古墳
12　大室城址（中世）
13　梅木遺跡（居館址・他）
14　多田山遺跡（古墳時代）
15　多田山東遺跡
（縄文・弥生時代他）
16　富士山古墳
17　西大室丸山遺跡（豪族館址）
18　荒砥上諏訪遺跡
（古墳時代住居址）
19　田向井遺跡（古墳時代）
20　柳田遺跡（縄文・古墳時代）
21　大室小学校校庭Ⅰ遺跡
（古墳時代末期・平安時代住居址）
大室小学校校庭Ⅱ遺跡
（古墳時代前期末住居址）
大室小学校農場遺跡
（古墳時代後期住居址）

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡図

Ⅱ　発掘調査の概要

１　遺跡の位置と周辺の遺跡

本遺跡は前橋市街地から東へ15km、国道50号線の北に併走する県道前橋・今井線と県道伊勢崎・深津線の交差点の南東300mに立地する大室小学校の西側を隔てる小道を挟んで接する位置に当たる。言い換えれば、上毛電鉄粕川駅から南南西約３kmの、史跡公園として整備中の大室公園内の前二子古墳の南方となる。

東には火山泥流丘陵地の多田山があり、北には古くから信仰の対象となっている七ツ石と呼ばれる巨石のある丘陵が、それぞれ東の赤堀町と北の粕川村の行政界をなしている。

遺跡の所在する荒砥地区は大規模圃場整備が実施され、現在では一面平坦な農地が広がっている感があるが、かつては流れ山と呼ばれる火山性泥流による独立丘があちこちに点在し、これらが巨石・巨岩を含むことから、あるものは信仰の対象となり、また古墳石室の構築材を提供することにもなったであろう。さらにこれらの独立丘の中には横穴を掘って石室を構築した山寄せの古墳等が多数存在し、市内屈指の古墳数を誇る地域として知られる地域である。

昭和10年の上毛古墳総覧によれば、旧荒砥村だけで365基の古墳が記載されている。このうちの最たるものが本遺跡北方300m前後に並ぶ国指定史跡の３二子古墳である。この３二子古墳を取り込んで前述の大室公園が整備されつつある。公園駐車場の東には帆立貝式古墳のＭ－１号古墳が復元整備され、南西側には養蚕を主とするに適した赤城型民家や古墳時代の住居と円墳がそれぞれ移築・復元され、総合的な史跡公園をなしている。

この民家が移築された台地南西斜面からは、約２万８千年前の旧石器が出土し、前橋市の古代史を大きく遡らせる画期的発見となった。

道路を挟んだ公園の北西側には周溝墓群で知られる上縄引遺跡が存在し、隣接町村を含んだ一帯が古墳時代の

遺構・遺跡の一大密集地となる感を呈している。

また、3二子古墳の主軸は微妙にその方位がずれており、東方でほぼ一点に収束する。この地点は特別な意味を持つという松島栄治氏の説を裏付ける如く、梅木II遺跡ではその大半を桂川の氾濫・蛇行により失っているものの、豪族居館址の濠が確認されている。

大室公園整備に先立つ内堀遺跡群や周辺の遺跡からは、弥生時代後期と目される樽式や赤井戸式の土器が古墳時代の住居址から共伴出土していることから、少なくとも弥生時代にはこの地に人跡が認められ、古墳時代以降にも定着することになった可能性を知る格好の資料となっている。

現在では、強大な権力を有した赤堀茶臼山古墳の被葬者の勢力範囲の中心地をこの地に求めたとする考えが定着しつつあるという(内堀遺跡群VII　'95)。しかしながら生産基盤となる大規模な水田跡遺構は未だに明確にはされていない。

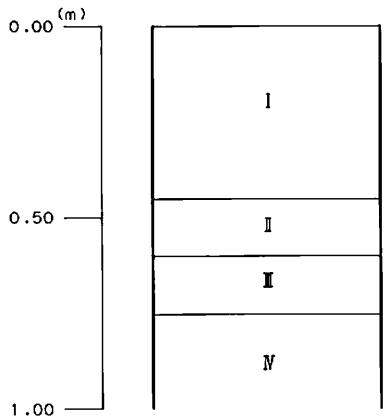
広く目を転じると、中・近世に及んでは、大室元城、大室城があり、これらのことが赤城南麓の自然の恵みの豊かさを如実に物語っている。江戸時代に前橋藩の厚い庇護を受けた産泰神社は近藤義雄氏によれば赤城三体仏を祀る三体神社が転訛したものという。このことも自然の恩恵を赤城山に求め託していた現れの一つであろう。

本遺跡はこの地区のこれらの発展に先駆けをなす一資料と言えよう。

2　基本土層

前述の如く荒砥地区は県営大規模圃場整備が実施されており、その様相を大きく変えている。わずかに昔日の面影を留めているのは、今も残る屋敷森に囲まれた農村集落のみであり、それも今では当世風の建物へと変化している。

本遺跡は舌状台地の末端南西部にあり、小学校の校庭とは2m程の高低差を持っている。調査区の北西に接する位置には、この圃場整備時に造成されたと見られる墓地があり、それに伴って表層は大きく整地されたと見られ、盛り土と見られる逆転層が上層を覆い、標準土層とするには難があるが、ここでは現地での実測値を記述しておく。



第2図　標準層位

I　灰褐色弱締弱粘細砂（耕作土・盛土）
II　暗褐色中締弱粘粗砂　As-B・Hr-FPを含む
III　黒褐色II層とハードロームの混土
IV　黄褐色高締中粘ハードローム　As-SPを含む

注　本文に使用した土層略号は以下の通りである
As-B　1108年降下浅間山起因軽石
Hr-FP　6世紀中葉降下榛名山起因軽石
As-C　4世紀降下浅間山起因軽石
As-YP　浅間板鼻黄色軽石層
As-SP　浅間白糸軽石層
As-BP　浅間板鼻褐色軽石層

III　検出された遺構と遺物

1　縄文時代

J-1号住居址

調査区北端部のC－3・4，D－3・4グリッドに諸磯式土器片を伴出する方形の遺構を検出。As-SPを含むハードローム面まで掘り下げて床面を構築している。

遺物は床面より5cm内外の高さで断片が検出され、本来の床面に密着した出土状況ではない。これは試掘時における桑の抜根の影響かあるいは墓地造成時のカクランによるものかは定かではないが、いずれにしても後世の影響を受けているためと思われる。

炉は焼土・灰とも明確には検出されなかったが、わずかな窪みと微粒の炭化物の散乱範囲を認めた。柱穴は確認できなかった。

遺物は半裁竹管による連続C字文の断片が主となり、諸磯b式とみなされる。他に混入遺物と思われるが関山II式と考えられる断片なども僅かながら検出される。

2　古墳時代

H-1号住居址

試掘調査時にC－3・4グリッドにおいて平坦な堅緻面が認められた。J-1号住居址の西に隣接する位置に当たる。試掘トレンチの直ぐ西側は一面がカクランを受けており、重機によるキャタピラ痕が数条走行している。従って、本調査においては、その規模・形状に関しては皆目不明である。

遺物は試掘時に鬼高式I期とみなされる模倣坏、内湾する口縁を持ち放射状に研磨された塊や剝離石片が検出され、精査の結果、同時期の甕片が数点検出された。

H-2号住居址

調査区南端部のH－0・1，I－0・1グリッドに位置する。(形状) 東壁がややすぼまるが、ほぼ正方形を呈する。(規模) 長軸4.8m×短軸4.7m、確認面からの壁高48cm (面積) 19.4m² (方位) N-25°-W (カマド) 東壁の南よりに位置する。主軸方向N-73°-Eで、全長124cm、幅93cm。構築材は粘土を使用。(柱穴) 4本を検出するが、P-3については他の3穴と様相が異なり、あるいは根の侵入痕の可能性もあるが、周辺に他の柱穴状落ち込みが確認されなかったため、これを柱穴と認めた。P-1、P-2は極めて深く、またP-4は三段に掘り込まれた様子が明瞭に確認できた。(貯蔵穴) カマド右袖脇にあり、逆錐台形を呈し、上端で長軸70cm×短軸58cm、下端で長軸43cm×短軸39cm、深さ56cm。(壁周溝) 幅12cm、深さ12cmでカマド部分を除いて全周する。(床面) とくに貼り床はなく、As-YPを含むハードローム面まで掘り込んで床とする。

遺物は、おそらくカマドに懸架されたと思われる甕 (No.35) が貯蔵穴部分から出土している。その出土レベルから、貯蔵穴が8割方埋まった時点で転落したと考えられる。さらに貯蔵穴西の壁際からは短頸壺が完形で出土 (No.1)、他に同種 (No.41他)、甕底部 (No.3)、粗い櫛歯状工具で削られた小型甕 (No.12)、同じく粗い櫛歯目を持つ甕(No.22)の他に、内湾する口縁の端部が直立する大振りで扁平な塊(No.37)、内斜口縁で内部ヘラ研磨の坏(No.2他)、鬼高式の示標とも言える土師器の模倣坏2点 (No.31)・(No.34) などが出土している。

3　その他の遺構

D－1・2グリッドには、ほぼ東西に走行する堅緻面が存在した。当初道状遺構かと思われたが、最終精査の結果わずかながら北に傾斜し、D－3グリッドに入ってその痕跡がなくなってしまうことが判明した。本来起伏に富んだ地形であったことから、畑の境界に沿った馬入れ的な可能性が高いと思われる。したがってここでは遺構とは認識しなかった。

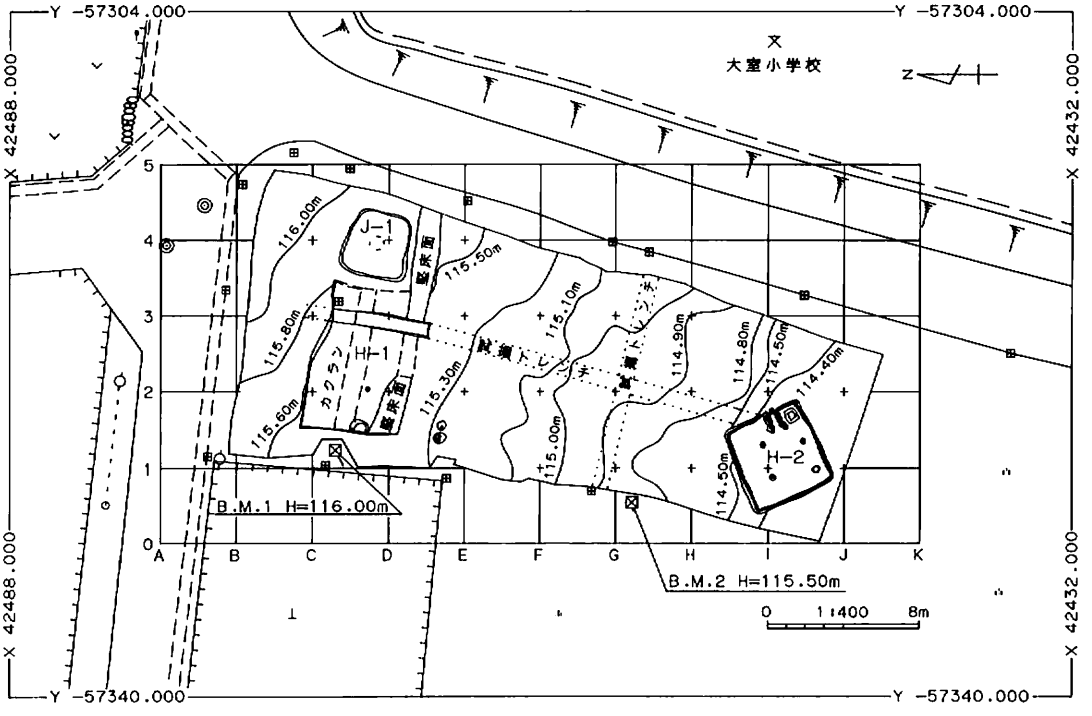
C－1グリッドにはD－3土坑が調査区内にその東半分を表している。半裁のみの調査となったが、古墳時代の土器を伴出するものの、その覆土は4層からなり、水平に逆転層を形成している。すなわち土坑検出面より上の調査区壁面の地層が上から下に人為的に埋められているのである。この遺構に関しても用途・目的が全く不明である。

Ⅳ まとめ

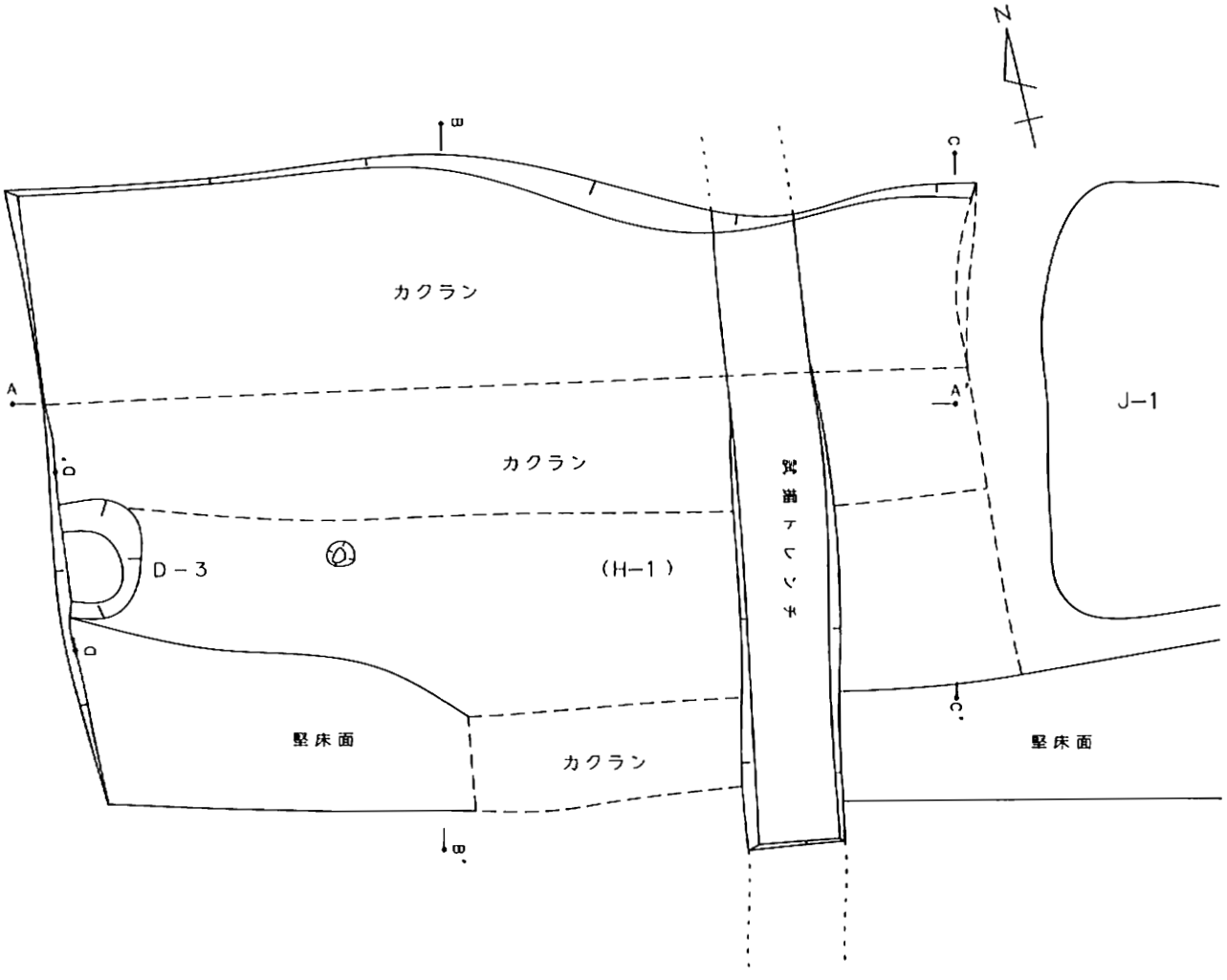
本遺跡は大きく見ると3二子古墳を取り込み、東に桂川、西に神沢川の流れる解析谷によって削られた舌状台地の末端部南西斜面に当たり、この地から古墳時代の住居址が確認できたと言うことは、東に接する大室小学校校庭で確認されている古墳時代住居址を含む集落の西端部に当たる可能性が考えられ、東に南下する桂川が生産基盤をも含めて大きな影響を持っていたことが類推できる。H-2号住居址の出土遺物からは、鬼高Ⅰ期の模倣坏が検出されている。隣接する赤堀町の遺跡から出土する遺物の編年資料との整合により、赤堀茶臼山古墳と3二子古墳それぞれとの前後関係等が明確に実証され、総合的に当時の様相を知ることができるであろう。

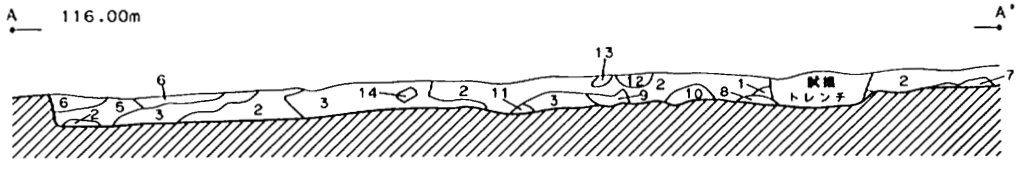
遺構細部については、わずか数センチの弧状掘り込みが垂直に近い角度で立ち上がっているカマドの全貌を、今回のH-2号住居址において、改めて確認することができた。

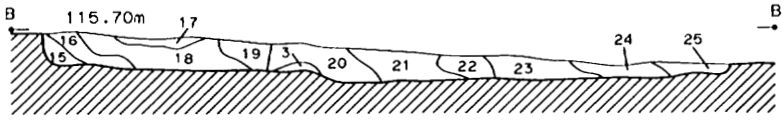
今回の調査では、集落全体の有り様を知ることは不可能であり地道な調査となったが、他の調査結果との整合や今後の調査の結果に大いに期待するものがある。

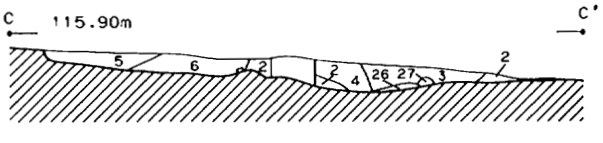


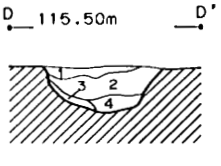
第3図　遺構全体平面図











D-3セクション注記　D-D'

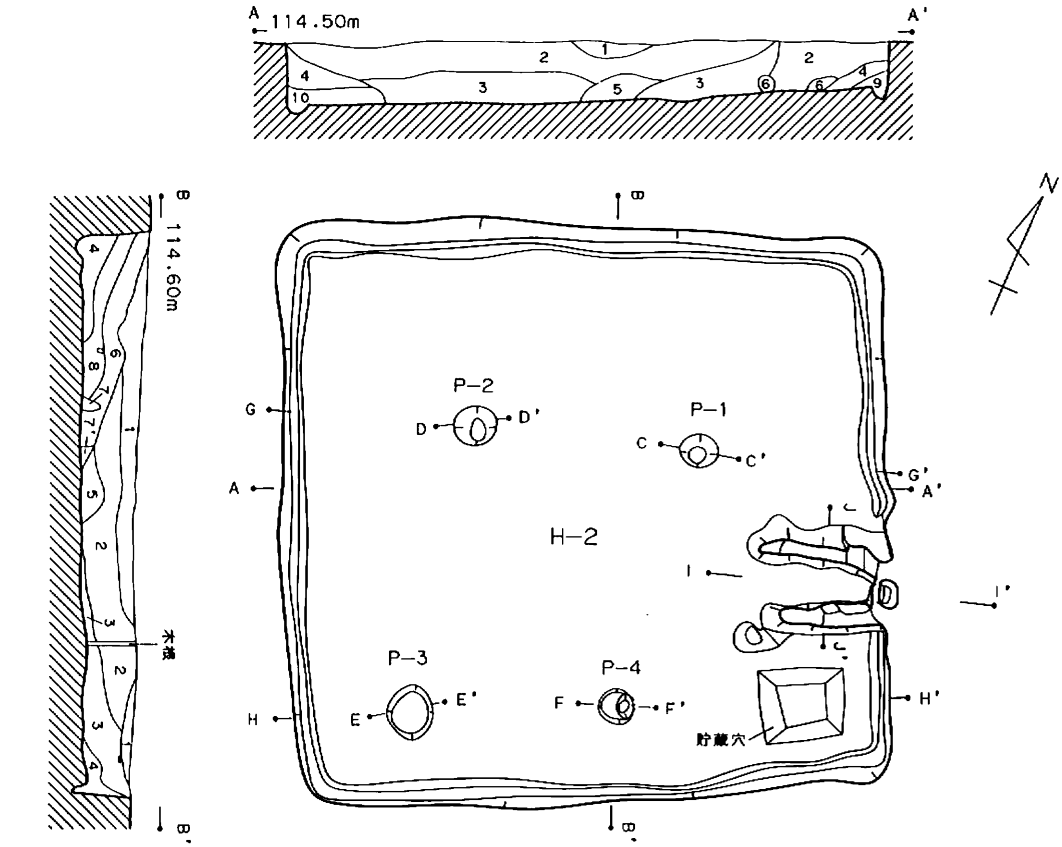
1　褐色高締中粘微砂　Hr-FP・As-B 5％混入
2　褐色中締弱粘細砂　Hr-FP・As-B 3％混入
3　黒灰色中締弱粘粗砂　Hr-FP・As-B 7％混入
4　暗灰色弱締弱粘粗砂　Hr-FP・As-B 5％混入

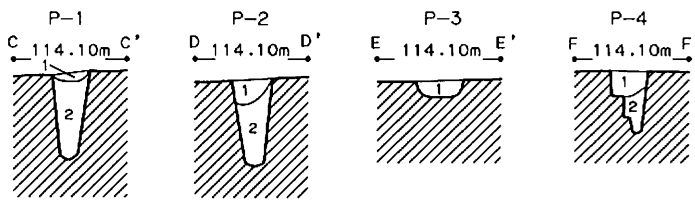
H-1セクション注記

1　黒褐色高締中粘微砂　As-C 7％
2　灰褐色中締中粘細砂（根）
3　明黄褐色高締中粘粗砂　As-SP 3％
4　3に根の侵入
5　灰黄褐色中締中粘細砂　ひげ根
6　暗褐色弱締弱粘粗砂　As-B・Hr-FP混在ラミナ
7　暗褐色弱締弱粘細砂
8　明黄褐色ハードローム
9　10に根の侵入
10　2にハードロームブロック30％
11　根
12　As-SP混ハードローム
13　As-YP混ハードローム
14　黒褐色高締中粘粗砂　Hr-FP 7％
15　黄褐色中締中粘細粒ローム　As-YP 3％
16　暗黄褐色中締中粘細砂　Hr-FP 1％　ローム粒 3％
17　褐色高締中粘細砂　ベルト状ロームブロック30％
18　暗褐色弱締弱粘粗砂　As-B 3％ロームブロック 5％
19　褐色中締弱粘粗砂　Hr-FP・As-B 1％
20　暗褐色中締中粘細砂　Hr-FP・As-B 5％　ローム粒 7％
21　暗褐色中締中粘細砂　Hr-FP・As-B 3％　根の侵入痕
22　暗黄褐色弱締弱粘粗砂　ロームブロック30％
23　黄褐色弱締中粘粗砂　ロームブロック15％
24　褐色弱締弱粘細砂　カクラン土
25　ローム粒カクラン土
26　2にロームブロック 5％
27　黒褐色中締弱粘粗砂　Hr-FP 3％

0　1:60　2m

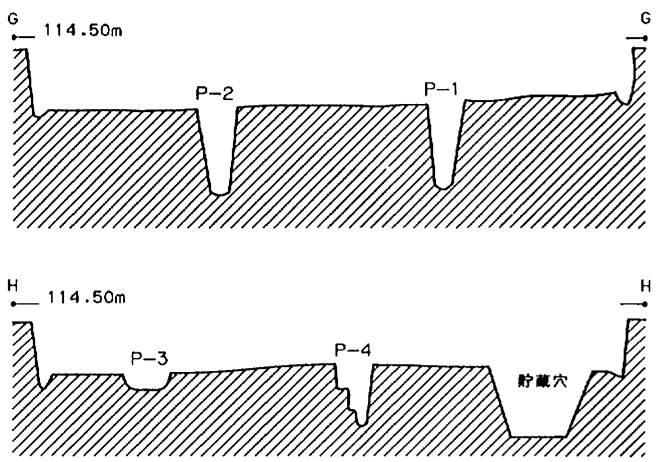
第4図　H-1号住居址平面・断面図





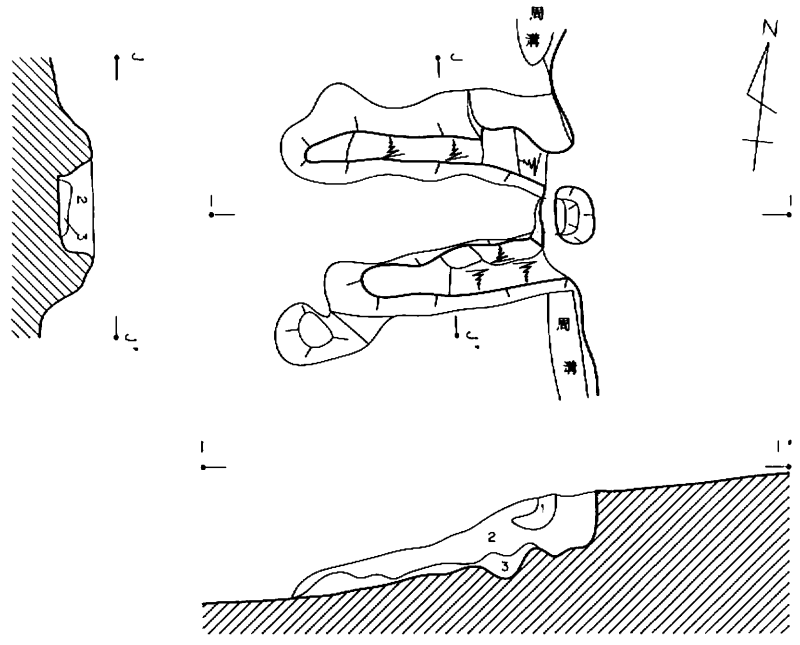
H-2 P1～4セクション注記
1 暗褐色弱締弱粘粗砂
2 褐色弱締弱粘粗砂

H-2セクション注記
1 暗灰褐色弱締弱粘粗砂As-YP 3％ローム粒5％
2 褐色中締中粘細砂 As-YP 3％混入ロームブロック7％
3 暗褐色弱締弱粘コロイド粗砂（水性堆積）ロームブロック5％
4 黒褐色弱締中粘粗砂 ロームブロック
5 暗黄灰色弱締弱粘コロイド粗砂（水性堆積）ロームブロック3％
6 黒褐色弱締弱粘粗砂 As-C 3％ロームブロック3％
7 明黄褐色高締中粘組砂ローム As-SP3％ 6を10％
7′ 6と7の5/5混土
8 暗黄褐色中締中粘組砂 6に30％のロームブロックを混入
9 暗褐色弱締弱粘コロイド粗砂 微粒ローム10％あり
10 暗灰色弱締中粘コロイド粗砂（水性堆積）ローム粒30％



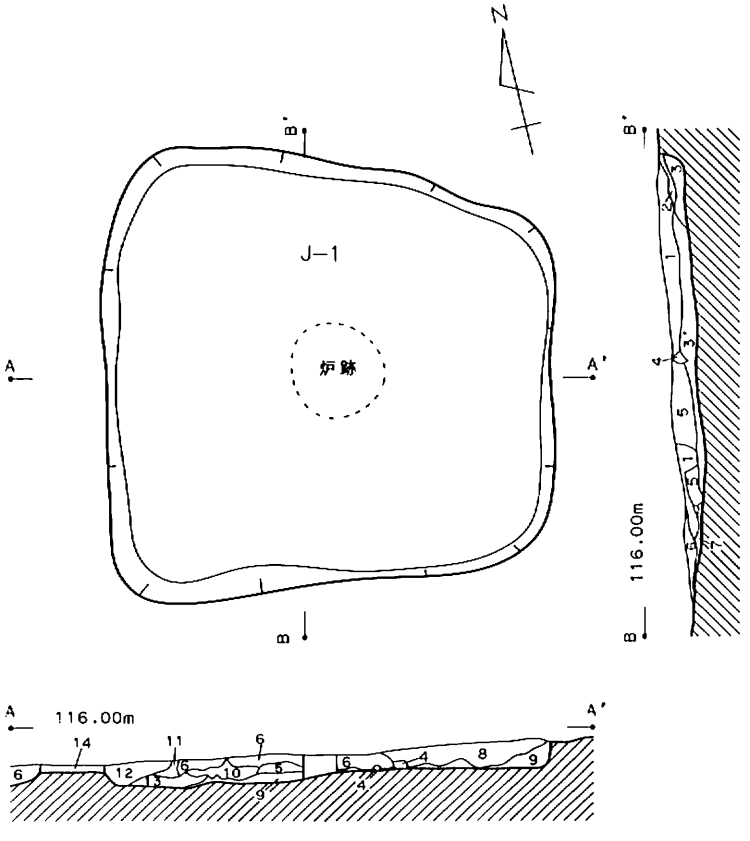
0 1:60 2m

第5図 H-2号住居址平面・断面図



H-2カマドセクション注記
1　灰白色高粘細砂　焼土粒含む
2　橙褐色焼土と灰の5/5混土
3　暗赤褐色中締中粘微砂

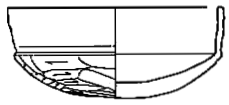
0　1:30　1m



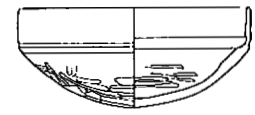
J-1セクション注記
1　黒褐色中締中粘微砂　Hr-FP 5％
2　暗褐色中締弱粘微砂　Hr-FP 3％
3　暗黄褐色高締中粘細砂　As-SP 5％
3'　暗黄褐色高締中粘粗砂　As-SP 3％
4　黒褐色高締中粘微砂　As-C 7％
5　暗褐色中締弱粘細砂　Hr-FP・As-C 5％
6　灰褐色中締中粘細砂（根）
7　明黄褐色高締中粘粗砂　As-SP 3％
8　暗褐色中締中粘粗砂　As-C10％
9　暗黄褐色高締中粘粗砂　As-SP 3％
10　暗灰褐色中締弱粘細砂　Hr-FP・As-C 3％
11　暗灰色弱締弱粘粗砂白色パミス1％ロームブロック3％
12　褐色中締弱粘粗砂　Hr-FP・As-C 3％　根
13　暗灰褐色中締弱粘細砂Hr-FP 3％
14　黒灰色高締中粘微砂　白色パミス5％

0　1:60　2m

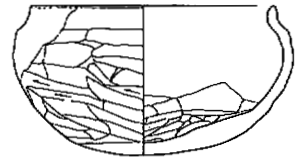
第6図　H-2号住居址カマド平面・断面図　J-1号住居址平面・断面図



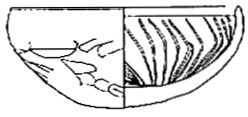
H-2　No34



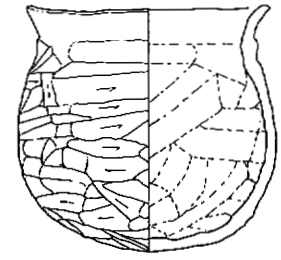
H-2　No31



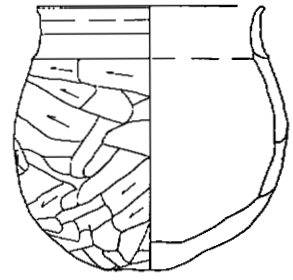
H-2　No37



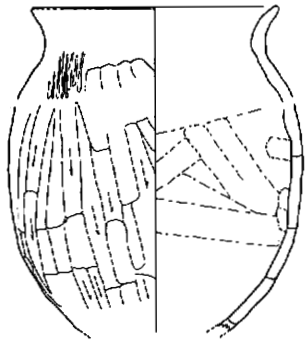
H-2　No2，4



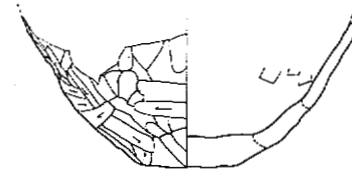
H-2　No1



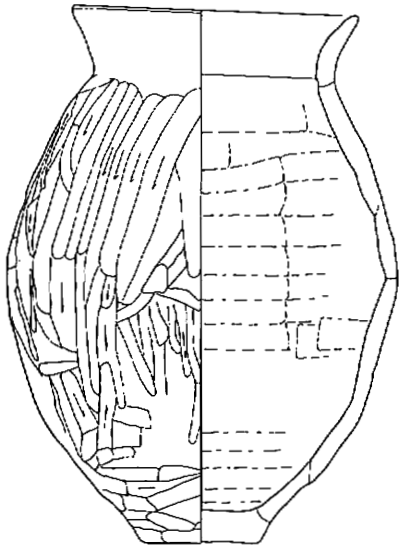
H-2　No41他



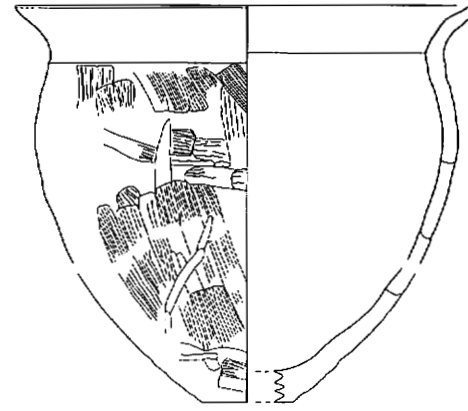
H-2　No12他



H-2　No3



H-2　No35



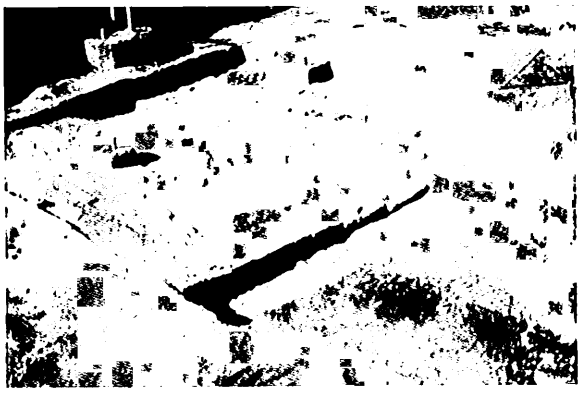
H-2　No22

0　1:4　10cm

第7図　出土遺物実測図

遺構全景（南から）

J－1号住居址完掘（南から）



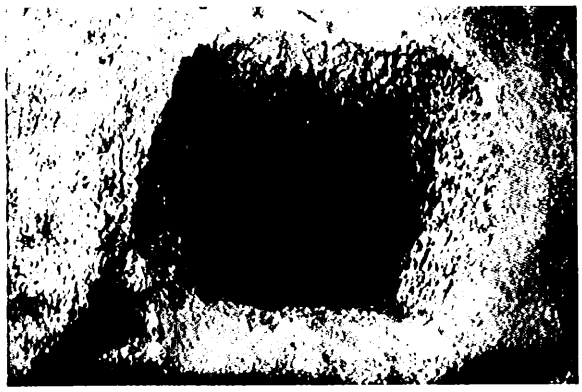
H－1号住居址全景（南東から）

H－2号住居址全景（西から）

カマド完掘（西から）

カマド完掘（東から）

貯蔵穴内遺物出土状況（北西から）



貯蔵穴完掘（南から）

図版1　遺構写真

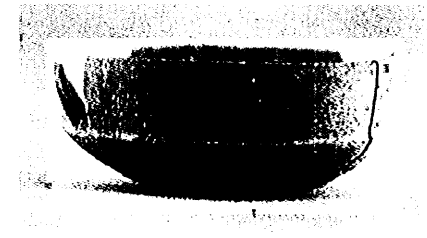
遺物出土状況（南から）

H-2　No31

H-2　No 2，4

H-2　No 1

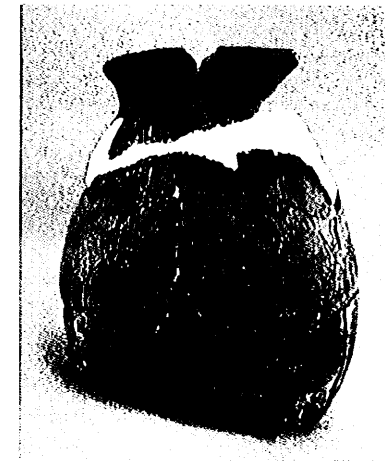
H-2　No41他



H-2　No34

H-2　No37

H-2　No22



H-2　No12他

H-2　No35

H-2　No 3

図版 2　出土遺物写真

抄　　録

フリガナ	オオムロショウガッコウコウテイサンイセキ
書名	大室小学校校庭III遺跡
副書名	公共開発（墓地造成工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ	
編著者名	新保一美（スナガ環境測設株式会社）
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0007　群馬県前橋市上泉町664番地の4
発行年月日	西暦1999年3月24日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
オオムロショウガッコウコウテイサンイセキ 大室小学校校庭III遺跡	マエバシシニシオオムロマチアザウミスワ 前橋市西大室町字上諏訪2811-1	10201	10E43	36°22′51″	139°11′39″	19990118 19990324	400m²	墓地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
大室小学校校庭III遺跡	住居址	縄文時代前期	住居址1軒	土器片等
大室小学校校庭III遺跡	住居址	古墳時代	住居址2軒	甕・坏・土師器片等

大室小学校校庭III遺跡

1999年　3月20日　印刷

1999年　3月24日　発行

発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664番地の4

編集　スナガ環境測設株式会社
前橋市青柳町211番地の1